

第5回自動翻訳シンポジウム パネルディスカッション

～2025年に向けた多言語翻訳の将来展望～

パネルディスカッション

テーマ：2025年に向けた多言語翻訳の将来展望

モデレーター：内山 将夫 氏 国立研究開発法人情報通信研究機構（NICT） 上席研究員

パネリスト：丸山 宏 氏 株式会社Preferred Networks PFN Fellow

東京大学大学院工学系研究科 人工物工学研究センター 特任教授

花王株式会社 エグゼクティブフェロー

川竹 一 氏 ソースネクスト株式会社 常務執行役員兼CTO

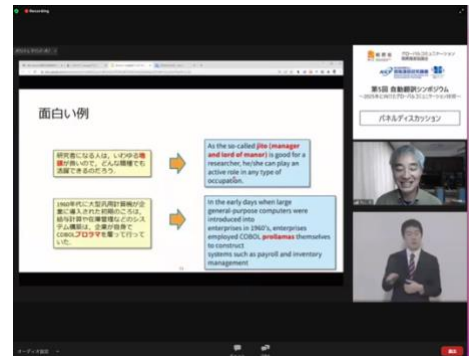
菅谷 史昭 氏 マインドワード株式会社 代表取締役CEO

令和4年3月11日、「2025年に向けたグローバルコミュニケーション技術」と題し、「第5回自動翻訳シンポジウム」がオンラインにより開催されました。シンポジウムでは、翻訳技術の進化による「言葉の壁のない世界が見えてきた」をテーマに、有識者らによる講演やパネルディスカッション、国立研究開発法人情報通信研究機構（NICT）が開発する翻訳エンジンを活用した国内企業（16社）の製品・サービス等のオンライン展示が行われ、シンポジウムの最後には4人による「2025年に向けた多言語翻訳の将来展望」と題したパネルディスカッションが行われました。



最初に、各パネリストによるプレゼンテーションが行われました。

丸山氏は「本一冊 機械翻訳で訳してみた」と題し、自著を機械翻訳で訳した経験について話しました。この試みは執筆した本を、当時、株式会社Preferred Networksに約1割ほどいた非日本人社員向けに、英語版として作成することを目的として行ったもので、AI自動翻訳ソフト「みらい翻訳」が使用されました。丸山氏は、機械翻訳することを意識して書き下ろした部分については比較的うまく翻訳されたものの、「研究者になる人は地頭（じあたま）が良い」と書いたつもりが、「地頭（jito・manager and lord of manor）」のように訳されてしまうという、面白い例があったことを紹介しました。また「採用」という日本語表現が、文脈によって「adopt」と訳される場合や違う英語に訳されてしまうことがあり、意図的に同じ日本語を使った部分については英訳を統一できないのかと感じた、と話しました。こうした経験から丸山氏は、注意して原文を書けば、自動翻訳は大変有効であると話しました。



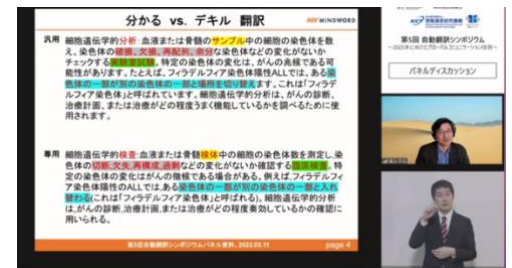
続いて川竹氏からは、具体的な翻訳技術の活用事例として、自動翻訳機「ポケトーク」について話しました。現在ポケトークは、海外においても広く使用され、販売総数は90万台を超えています。川竹氏は、ポケトークのミッションは「言葉の壁を無くすこと」と語り、喫緊の課題として2つのことを挙げました。

アジア・欧米を対象とした調査において、コロナ収束後に行きたい国として日本が上位に入っています。しかし、日本人の英語力は低下してきているというデータもあり、せっかくコロナ収束後にインバウンドが増加しても商機を逃してしまう可能性があります。さらに、近年の国際移民の動向により、非英語話者への対応が世界的な課題として求められています。ポケットークや、今後サービス展開する、Zoomなどのリモート会議に対応するソフトウェア「ポケットーク字幕」により、こうした課題に対応できると話しました。なお、現在ポケットークは米国市場において大きく販売実績を伸ばしています。



3人目の菅谷氏は、「利用者の選択肢が増える自動翻訳」について話しました。

自動翻訳には大きく分けて汎用翻訳エンジンと専用翻訳エンジンがあります。汎用エンジンは、例えばGoogle翻訳やDeepL翻訳など、“分かる”ことを目的とした解読用です。それに対し専用エンジンとは、医療、法令、特許などの専門用語も多く使われる分野で出版補助としても使用可能な、“できる”エンジンのことだと説明します。この2つの違いについて、細胞遺伝学に関する英文をそれぞれのエンジンで自動翻訳したものが紹介されました。



汎用エンジンでは「実験室試験」と訳されたものが、専用エンジンでは「臨床検査」と訳されるなど、いくつかの箇所に違いが見られ、汎用エンジンでは理解できなかった専門用語が、専用エンジンでは理解できるように訳されていることが紹介されました。一方で、汎用エンジンの精度も日々進歩しているため、専用エンジンが必要なくなる日が来るかもしれないと菅谷氏は話します。

パネリストの発表終了後には、モデレーターの内山氏の進行により、パネリスト同士や視聴者からの質問に答える形でパネルディスカッションが行われました。

丸山氏は「機械翻訳を意識しながら執筆することで、速度が遅くなることはあったか？」と聞かれると、「むしろ書きやすかった。日本語として出版する場合の方が言い回しを色々考えてしまうので、かえて時間がかかる」と述べ、日本語表現の複雑さを感じさせました。



「言葉の壁は2025年にはどのくらい解消されていると思うか？」という質問では、川竹氏は「100%には程遠いと思うが、自動翻訳を使用する人が増えればデータ量も増え、翻訳の精度は上がるだろう」と回答し、自動翻訳技術への今後の期待感を述べました。

さらに菅谷氏から川竹氏に対し、「メガネにカメラを仕込んで、見た文字を翻訳するような、音声ではなく文字の翻訳は可能だろうか？」という質問が投げかけられ、川竹氏は「可能だと思うが、メガネはファッション性を求められるので、普及するのは難しい。カメラなどのデバイスの方が先に普及するのでは」と述べました。他にも、丸山氏からの「他の翻訳エンジンに切り替えるときに移行できないのは困るので、翻訳エンジンのポータビリティがあると良いと思う」という意見や、「売上金額や法律の第〇〇条などの間違えられると困る数字が確実に翻訳されると良い」という菅谷氏からの意見など、これからの自動翻訳技術について意見交換が行われ、パネルディスカッションは終了しました。

(令和4年3月作成)

問い合わせ先

主催：総務省、グローバルコミュニケーション開発推進協議会
 国立研究開発法人情報通信研究機構(NICT)

グローバルコミュニケーション開発推進協議会事務局
(NICT 内)
gcp-info@ml.nict.go.jp
